



「1票の重み」

昨日、生徒会役員選挙が行われて、放課後に図書室で開票作業が行われました。開票はだれもが参観する権利があります。今回の開票は28名の生徒が参観しました。選挙の開票が正しく行われているかをチェックすることは有権者として大切なことです。

開票作業が進む中で、様々な問題が出てきました。「会長の投票用紙に副会長候補者の名前が書かれ、副会長の投票用紙に会長立候補者の名前が書かれています。どうしますか?」「副会長の投票用紙に二人の候補者の名前が書かれています。どうしますか?」さまざまな開票の判断をするのは有権者の代表である立会人です。今回の開票の立会人は生徒会本部役員が引き受けてくれました。立会人である生徒会本部役員のもとに、さまざまな開票に伴う判断が迫られます。一枚の投票用紙に二名の名前を書いた場合はどう判断するのか? 「0.5票ずつ票に入れたらどうでしょうか?」「これは無効票扱いなのでは?」立会人で結論が出ないときは、アドバイザーの小田原市選挙管理委員会の人に質問をして一つ一つ解決していきました。そのやり取りを参観している28名の生徒(有権者)がじっと見守ります。審議のポイントは一人の票を無駄にしないように保障していくことです。「この票は、〇〇候補者の名前だね」読み取りにくい字も立会人が1票が無駄にならないように審議していました。「白票も投票数にいれるのかな?」「白票も一つの有権者の意思表示で大切だと思う」など、票を大切に扱っていることが票を入れた人を大切にしているようで見ていて暖かい気持ちになりました。

開票作業が進み、票の集計をしたら副会長候補が同数でくじ引きとなりました。開票所に緊張が走りました。「くじは誰が引くのですか?」単純な疑問がみんなの頭の中をよぎりました。小田原市選挙管理委員会の方も事務所に確認しますと電話を掛けました。その結果、開票所最高責任者が引くとのことで、選挙管理委員長の長谷川さんがくじを引くことになりました。緊張した顔で長谷川さんがくじを引きます。かすかに指先が震えていました。くじを引き終わるとその場に長谷川さんはしゃがみこんで「怖かった」と大きな声で言いました。全校生徒の投票で同数になった候補者を最後は自分でくじを引く責任を感じたのだと思います。人を人が決める事がこんなにも重いものかを選挙管理委員会、立会人、参観者が感じた瞬間でした。開票作業をみんなの大きな拍手で終わったことがとてもすがすがしい感じがしました。人を選ぶ、そして、正しく開票するこれらの手順こそ、人類が多くの犠牲をだして確立してきたものなのだと思います。

来週は第二回テストがあります。テストが終わると直ぐに、前期の成績をつけます。夏休み前の三者面談では、4月から7月までの中で5教科は評価を出しましたが、技能教科は評価資料が少なく評価を出すことができませんでした。10月6日に渡す通知表では3年生の市「ry」法が少なく」技能強化の第一回のテスト前期の成績は技能供養かも